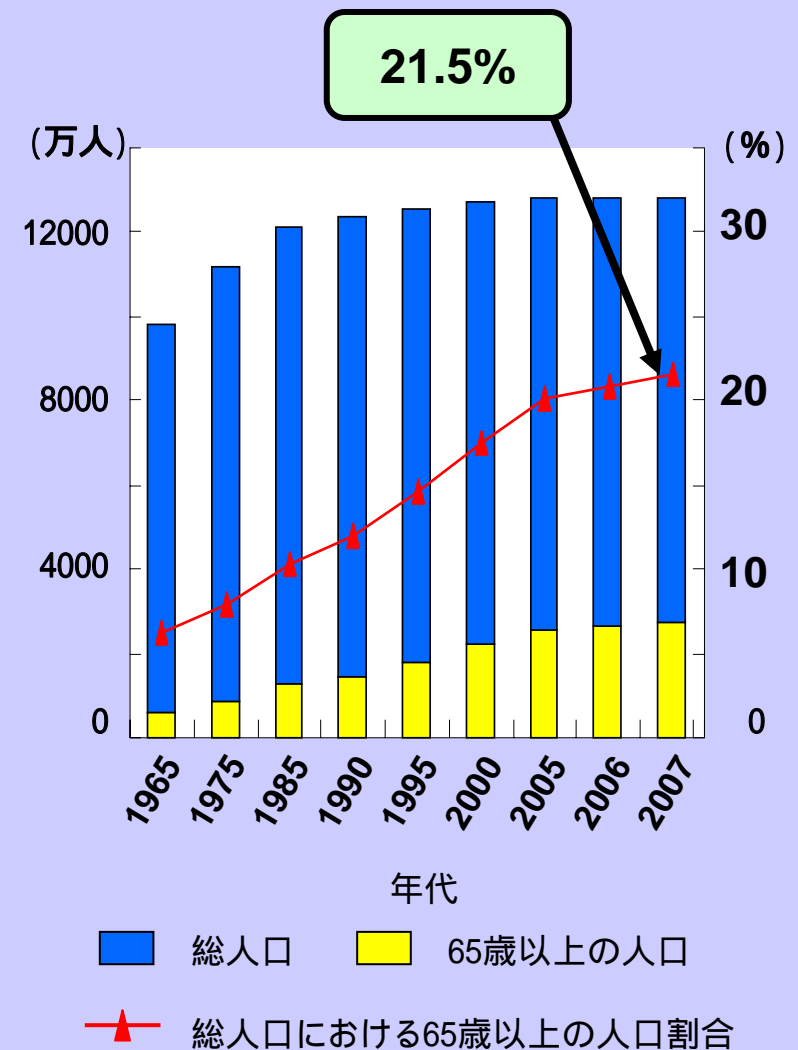


[背景]

わが国における高齢者の人口比率は年々高まり、介護を必要とする人が増加している。そうした状況において、介護（在宅医療）の分野における薬剤師の活躍が期待され始めている。

しかし、介護現場における薬剤師の必要性は未だ明確にされていないのが現状である。



出典: 総務省統計局ホームページ

[介護施設での取り組み]

現在、当社と連携している介護施設(全9施設)において、医師が施設を訪問し診療を行っている(以下「往診」と呼ぶ)。

当社では薬剤師が看護師と共に医師の往診に同行し、治療計画に基づき健康管理を行っている。薬剤師が積極的に往診医と看護師に関わっていくことで入居者に対する訪問薬剤管理指導の質を高めている。



[各施設詳細]

施設	入居者数 (名)	往診医数 (名)	看護師数 (名)	担当薬剤師数 (名)
A	33	1	3	1
B	55	2	4	2
C	46	1	3	1
D	43	2	3	2
E	47	1	3	1
F	82	3	2	1
G	50	2	2	2
H	48	2	4	2
I	35	1	5	1

(2009.6現在)

[往診の流れ]

往診時

- 検査値
- 患者の容態や訴え
- 往診医の指示

アセスメント

- 服用状況
- 副作用発現の有無
- 相互作用の確認
- 薬剤の有用性検討

カンファレンス

- 処方内容確認
- 処方設計
- 外用、頓服薬調整
- 残薬調整
- 情報の共有化



[目的]

介護施設における**薬剤師の必要性**を検討する。
そのために以下の項目を調査した。

薬剤師による往診同行の必要性
(対象者: 往診医、看護師)

往診同行における現状の把握
(対象者: 薬剤師)

[方法]

調査方法



当社と連携している介護施設の往診医15名、
看護師29名に対してアンケート調査を行った。
各調査項目について5段階評価で回答を得た。

調査項目

薬剤師に期待する役割についての項目
(往診医10項目、看護師5項目)

[方法]

調査方法

当社の介護施設担当薬剤師13名に対してアンケート調査を行い、往診同行の現状について情報収集した。



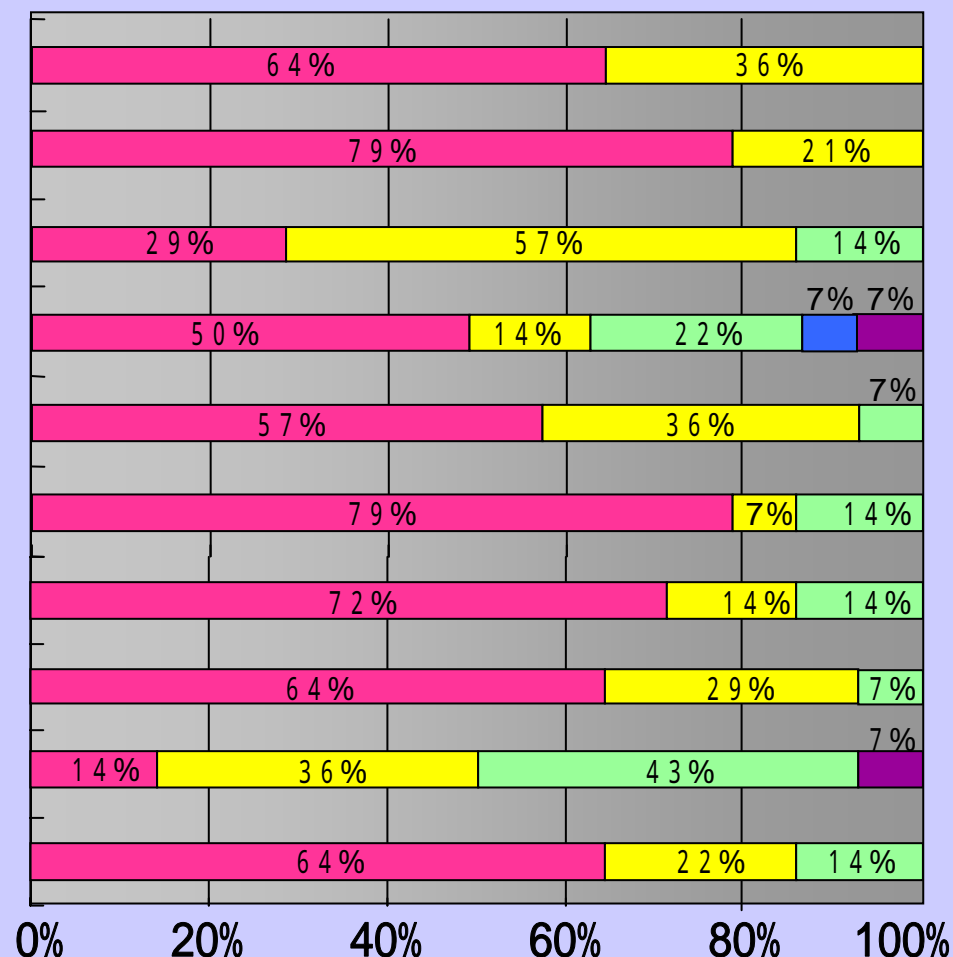
調査項目

往診同行時における薬剤師の発言力や地位
処方設計への影響力
往診時の雰囲気や往診医との
コミュニケーションの現状

[結果] 往診医が薬剤師に期待すること

■期待する ■やや期待する ■どちらでもない ■あまり期待しない ■期待しない

- 服薬状況の確認
- 他科受診薬、持参薬の相互作用、重複などの確認
- 副作用発現の有無確認
- バイタルなど患者の体調把握による個々にあった服薬指導
- 服薬指導時に得られた情報の共有化
- 処方意図の理解
- 処方設計の協力 (用法・用量・剤形等の助言や決定)
- 処方薬変更の提案
- 医療材料(OTC商品)などの提供
- 服薬上の注意に関する患者、看護師、スタッフへの伝達



調査対象者15名 回答者14名

看護師が薬剤師に期待すること

■期待する ■やや期待する ■どちらでもない ■あまり期待しない ■期待しない

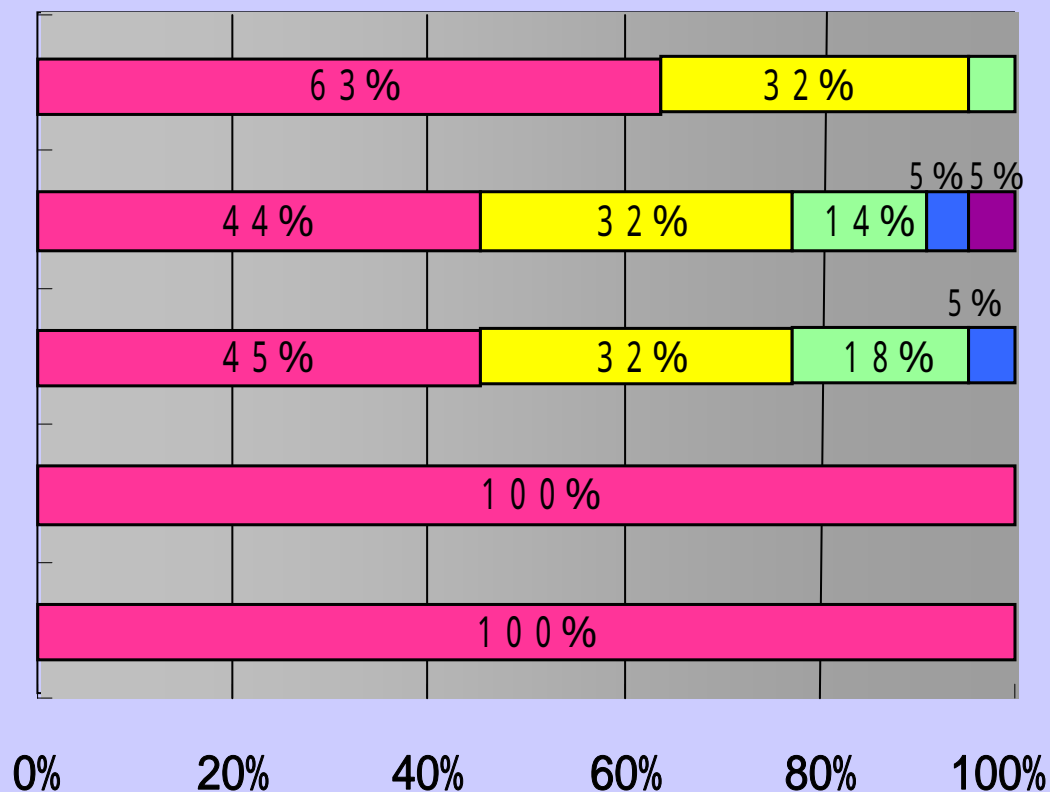
往診医の処方意図確認

患者の病態把握

バイタルなど患者の体調把握
による個々に合った服薬指導

使用上の注意点や特殊な用法
がある薬剤の情報提供

重篤な副作用がある薬剤による
副作用初期症状の伝達



調査対象者29名 回答者22名

[結果] 往診同行の現状

往診同行時における薬剤師の 発言力や地位

(+)意見

- 積極的に発言できる
- 発言内容は大体取り入れてもらえる
- 往診医から積極的な処方提案を要望される

(-)意見

- 往診医や看護師と比較して発言は多くない、あまり発言できない
- 残薬調整や薬の継続確認程度の発言力しかない
- 往診医は看護師に対して患者に関する質問をすることが多い
- 往診医 > 看護師 > 薬剤師の地位関係は否めない



調査対象者13名 回答者11名

処方設計への影響力

(+)意見

- 薬剤師が提案すれば意見を参考にしてもらえる
- 検査値や症状から処方薬の提案を要求されることがある
- 外用薬や頓服薬の数量調整、内服薬の残薬調整は基本的に薬剤師に任せられている
- コンプライアンス改善のため、用法や剤形変更の提案を行っている

(-)意見

- 往診医が自身の処方設計にこだわりがあるため、変更提案はやや困難である
- バイタルや検査値からの変更提案は難しい



往診時の雰囲気や往診医との コミュニケーションの現状

(+)意見

- 往診時の雰囲気は良く、穏やかである
- 往診医、看護師共にコミュニケーションは良好である
- 疑問点を相互に質問し合うことにより、情報を共有できている
- 往診医から薬剤師の必要性を感じてもらえている
- 持参薬情報や服薬状況を往診医に伝え、提案を取り入れてもらえている



[まとめ]

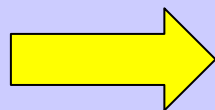
現状における薬剤師の発言力は弱く、往診医や看護師と比較して発言頻度は少なかった。主な発言内容は残薬調整やコンプライアンス改善を目的とした用法および剤形変更に関するもので、往診医や看護師の期待する役割とは違いが見られた。

しかし、検査値や症状から往診医に処方提案を行った例、持参薬情報や服薬状況を往診医へフィードバックした例など、処方設計に貢献する事例もあった。

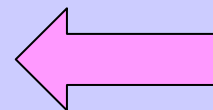
[薬剤師に求められること]



往診医



薬剤師



看護師

- ・ 他科受診薬、持参薬の相互作用、重複などの確認
- ・ 処方意図の理解
- ・ 処方設計の協力
- ・ 服薬状況の確認
- ・ 情報の共有

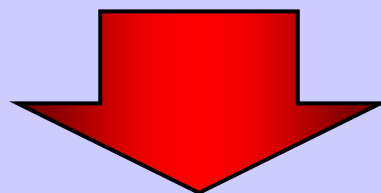
- ・ 薬剤の管理
- ・ 薬剤の情報提供
- ・ 個々に適した服薬指導
- ・ 処方意図の確認

[考察]

- ・ 薬剤師は往診医および看護師の求めに応じた情報提供や、状況に適した薬学的な提案を積極的に示すことが重要である。
- ・ 医薬品の適正な使用は、介護の質を高める上で欠かすことができない。そのため、薬の専門家である薬剤師が積極的に在宅患者への支援を行うことが重要である。

[結論]

往診同行において薬剤師は併用薬、相互作用、重複投与さらには副作用などの情報提供を必要とされている。



今後、介護施設において薬剤師による往診同行の必要性をより高めていくためには、これらの職務を確実に果たし、訪問薬剤管理指導の質を向上させることが重要であると考えられる。